町内珍事　メイト？

コニ・タン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
町内珍事　メイト？

【Ｎコード】
Ｎ０００８Ｅ

【作者名】
コニ・タン

【あらすじ】
本編である「学園珍事ファミリア！」に時間軸が追いつかなくなってきているので、誠に勝手ながら連載停止を決定しました。少ない更新でしたが、読んでくださっていた皆様には深くお詫び申し上げます。

第一話：5号室の稲生さん（前書き）

世界観は「学園珍事　ファミリア！」の一話、「世界観的なもの」を見てください。

第一話：5号室の稲生さん

「ここ……か」

目の前にあるのは少し貧相めのマンションっぽいアパート、今日から俺が住む場所だ。
ここの名前は……確か繚乱荘（りょうらんそう）だったと思う、あまり覚えていないが。
さて、ここで俺がこの建物に住むこととなった理由を話そうか……。

＊＊＊

俺は商業の町、志乃崎町に住む何の変哲もない高校生だった。
父が営んでいるのは酒屋、それなりに大きく、八人家族だったがそれでも十分に余裕はあるぐらいだった。

その日、俺は友人と遅くまで遊びすぎ、帰ったのは夜。

（あー、もうみんな飯食ってるかなー）

と、他愛の無いことを思いつつ居間へ直行。
するとそこには母親だけが居た。いつもならばみんなの団欒の時間なのに。

「一深（ひとみ）、よく聞いて」

一深とは俺の名前だ、これのせいでよく女に間違われるのが悩みの種だったりする。

まぁ、今はそんなことどうでもいい。母親の顔はいつになく真剣だ。

「お父さんが……お父さんが……」

親父が、どうしたって？

まさか……事故にあったとか言うんじゃ……。

「キャバクラ通いで家の貯金を使い切って合わす顔が無いとか書置きを残して海外逃亡したの！！」

オイ。

なんだそれは。確かにあの人の女好きは相当なもんだが……そんな店にまで行っていたとは……。

「という訳で一深、私たち家族は散り散りになっちゃいま～す♪」

ま～す♪、じゃねぇよ。どうしてそんなに明るいんだよ。

「とりあえず下の二人とおじいちゃんはここに残るということで、ね。貴方と上二人は小鳥遊町の方に出てバイトしてきてほしいのよ～、このまま酒屋経営を続けるのも難しいと思うの～」

確かに、親父は人格的には問題だらけだがこの酒屋がまともに動いているのはあの人の手腕による所が大きい。……いや、大きかった、か。

あ、ちなみに俺は5人きょうだいの真ん中です。

「母さんは？」

とりあえず家に帰って初めて口を開く。

これで母親がなにもしないのだったら納得がいかないからだ。
「お母さん？　お母さんはね、お父さんを連れ戻してくるわ……うふふ……」
その手にはいつの間にかメリケンサックがはめられていた。
ちなみに、目がマジだった。
母さんは昔、族の特攻隊長だったという祖父の与太話を思い出した。

＊＊＊

と、そんな事があったのは三日前であり、俺はさっそくこのアパートに引っ越した。
どうしてここかというと、母親のコネがあって安く部屋を借りる事ができたからだ。
……どういうコネかは気にしない方向で。
「しかしねぇ一深、かあさまもとつぜんすぎよね～」
「そうだね、姉さん」
いつの間にか後ろには姉が立っていた。
だが驚く事ではない、この人は神出鬼没過ぎて俺は既に諦めの境地に入っている。
「ぶ～、どうしておどろいてくれないの～！」
「そりゃあ姉さんは日頃からそうだから。というか子供っぽい所、

直しなよ」

口調も幼いし発音も幼いしそのくせ身体は人並みに育ってるし、この人の対応は知らない人には難しいだろう。
ちなみに知っている人の対応、『深く関わるな、適当にあしらえ』。
とりあえず姉さんはいつになくハイテンションだ。

「う～ん、一深ったらかわいい！　クールっぽいけどかわいい系で～、ん～、もうくびわつけて飼わせて！」

「お断りだよ」

と、そこまでいった所であることに気が付く。

「……姉さん、兄さんは別の所行ったのに、なんで姉さんはこっちに来てるかな？」

「え～、どうせいしようよ～。お姉ちゃんとうれしはずかしふたりぐらししようよ～」

やっぱりたかる気か、この半ニートめ。
まぁ、これは予想通りだ。というか俺が言わないとどうせバイトもしないんだろうし、丁度いいといえば丁度いい。

「……家賃電気ガス水道、半分ずつね」

「うん！　がんばる！」

よし、まぁこれは楽になったと言うべきか。……俺の身の安全を考えなければ。

よし、とりあえず部屋に行くか。確か６号室だな。

＊＊＊

入った部屋はがらんとしていた。……ま、荷物運んでいないんだから当たり前か。
とりあえず三部屋あって、その内の一つ＝リビングはキッチン＆ベランダ付き……結構いい部屋だな。
こんな部屋に格安で入る事が出来るコネを持つ母を尊敬しよう、恐れないで尊敬しよう。
とりあえずそのリビングに向かい合って座る俺と姉さん。

「で、姉さん……もう仕事は決まった？」

「メイドさん！　……なによ、そのふあんげなかおは？」

いやだってこの下手したら舌足らずになりかねない喋り方のこれがメイドさん？
あのテキパキ動いて旦那様的な存在の手助けをするあれ？　……まぁどじっこメイドならかろうじてなんとかなりそうだが。

「まぁ、メイドさんというよりおそうじ係なんだけどね」

なるほど、なら安心……できねぇ。

「そういう一深はもうきめたの？」

「あぁ、俺は食堂の店員」

昨日、一谷食堂というところに電話をかけたら一発で採用してもらえた。
どうやら人手が足りていないようだ、それのせいで最近まで休業していたらしいし。
と、姉さんと雑談をしていると、ドンドン、と扉を叩く音が聞こえてきた。
「一深、でて」
「姉さんが出なよ」
「めんどうくさい」
くっ……この半ニート！
とりあえず扉を開けるしか無さそうなので開ける。
「はひ！　やっぱりお引越し様ですか！」
そこに居たのは女性だった。
髪は腰まで伸びていて、身体の方はというとピンクいパジャマ（＋クマさん模様）を着ている。
スタイルは引き締まっている、引き締まらなくてもいい所まで。
まぁ、そんな事よりも気になったのは目。
瞳孔開いてる。
……世の中にはこんな人もいるんだなぁ。
とりあえず見た目で判断してはいけない、こんな見た目でも多分引越しの挨拶に来た良い人だ。

と、俺の思考がそこまで回った時に、女はどこから取り出したのか、“それ”を差し出しながらいった。

「あ、あのこれ！　引っ越し祝いの……引越しそばです！」

……色々とツッコミたい台詞だった。

だがまぁそんなところは置いといて、ある一点だけに絞ろうか。

「それどん〇衛」

おもいっきりうどんです。しかもカップ麺とはどういう了見か。

「はぁうあ！？　ども申し訳ゴザイマセン！　私のミスです！」

わたわたと慌てるこの人、とりあえず名乗ってほしい。

と、その時後ろからぬっと手が現れた。

もちろん姉さんだ、後ろから僕の肩に手を回し、そのまま頭を胸に抱く。

「まぁまぁまぁ、おちついてごきんじょさん」

おお、姉さんが久しぶりに姉さんだ。発音はアレだけど。

「私は稲生（いのう）　夢萩（むはぎ）、でこっちが稲生（いのう）　一深（ひとみ）。で、あなたのなまえは？」

じたばたしていたご近所さんも落ち着いたのか、動きを止めて深々と頭を下げた。

「は、はひぃ！　話、私のなめぇは、村崎（むらさき）　紫言（ゆかり）いますです！」

とりあえず焦るのはデフォルトのようだ。

「わ、私の部屋は5号室でお隣さんなので！　出来れば仲良くしたいなぁと！」

このアパートは4号ごとに階が区切られており、5号室という事は二階の一番端っこだ。

「7号室の白咲(しろさき)君はひょっと無愛想なのでっ！　私だけでも仲良く仲良く仲良く仲良く……きゅう」

あ、倒れた。

「姉さん……この人、部屋に運んでおいて……」

「まぁ、ゆうかいかんきんじけん？」

「違うよ、どっちの部屋でもいい。……俺は今から仕事行くんで……」

そして、俺の新生活が始まった。

第一話：5号室の稲生さん（後書き）

いや～、始まりましたね。
一深（以下一）「始まったね」
正直言っちゃうと本編がシリアス行った時の逃げ場所のつもりなんだよね、これ。
一「ひどいな」
気にしない気にしない、前からこういうのもやってみたいと思ってたし。

では、次回は明日になるか一週間後になるか一年後になるかは分かりませんが、メイトをよろしくです。
一「あー……よろしくお願いします」

第二話：7号室の白咲さん（前書き）

一ヶ月程度で更新できました……次の更新がどうなるかは不定ですけど……。
こっちは半分息抜きで書いてるんで、軽く読んでください。
ちょっとした時間に適当に流し読みして頂ければ、作者冥利に尽きます。

第二話：7号室の白咲さん

そして俺はバイト先の一谷食堂に辿り着いた。
店内は和風、テーブル席が5、座敷が3で、個人経営としては妥当な大きさだろう。
もちろんのように掃除もキチンとしていて、店の隅などにも積もったホコリは見受けられない。
うん、中々雰囲気の良い店だ、しかし――

「どうもですです、私が店長の一谷（いちのたに）　風香（ふうか）ですです」

――何の冗談だ、これは？
目の前に居るのは子供、多分中学生か小学生ぐらいだろう。
服装、ゴスロリドレス。
長い黒髪と黒いフリル付きドレスは、なんというかものすごく闇夜に融けそうだった。

「……あー、えっと、よろしくお願いします」

この街は労働基準法なんて完全無視で、子供が働いていてもなんら問題はない。
しかし……やはり経営者が子供というのは落ち着かない。

「貴方は学生さんですね？　あんまり仕事は詰めない方がいいですですか？」

「いえ……手っ取り早く稼ぎたいんで、詰めてほしいです」

「ですですか。ちなみに私は中学生なのですですが、ほとんどサボ

ってますます」

ペロリと舌を出して笑う店長、喋り方が変なのは気にしないで置く。
しかし……大変だな、これは。
一発採用なんて怪しいと思ったが……まぁ、こっちも大したバイトは出来ないんだから妥協しよう。

「じゃあ、俺は暖簾(のれん)上げてきますね」

「お願いしますます……あ、お店の前に休業の看板もあるので、それも取ってきてくださいさい」

「はい」

まぁ、そういう訳で店の外へ。

戸に手をかけて開くと、大仰な音を立てて鈴のような音が鳴る。
うん、食事処の風情。
でまぁ、開け放ったその先にはなんかカップルが居た。
男の方は小奇麗に整えた髪と主張しすぎない服、何よりもその顔が目を引き、男の俺から見ても美男子だった。
女のほうは小さい、いや店長よりは年上のようなのだが……顔つきはさほど幼くは無いのでもしかすると同い年だろうか。

「あー……」

何でだかは知らないが、男は全身から滝のように脂汗を流しており、女の方はそれを不思議そうに見つめている。

まぁとりあえず、入店を勧めるべきだろうな。

「もう営業中なんで……どうぞ」

男はロボットのような動きで、女はスキップするかのような軽々しさで店内へと進んでいった。

＊＊＊

で、修羅場。

なんだか知らないが、二人は店長の知り合いらしい。

そして、僕が見た所では店長、その男が好きっぽい。

で、三角関係。

「れ～んっと君♪」

「わぁ結華（ゆいか）笑顔が一ミリも笑ってないよ？」

「いやぁ、まさかこの子が働いてるお店だったなんてねぇ」

「いや誤解だよ、適当に選んだらここだっただけで……」

「仲良しさんなんだねぇ」

「ねぇ結華落ち着いて。この子の年齢考えて。僕の射程範囲外。僕は健全に同年代の子が好きです」

「わぁ、私の知らない間にロリコンに目覚めてたんだぁ」

二人の会話が聞こえてくる、なんというか男、可哀想。
で、店長もそのまま話し続けるし、彼女さんも素振り（素蹴り？）やってるし……。
なんだろう、この状況は。
……えっと、まぁ一応マニュアル通りに……。

「あの～、お客様、出来れば席に座って飯食ってほしいんだけど」
口調が乱暴なのはまぁ許してもらおう、初日だから仕方ない。
そんな俺の語り掛けに、男は泣きそうな顔で叫び返してきた。

「じゃ、じゃあ結華を止めてよ！」

結華、というのは彼女さんの事だろう、店長は風香だし。
しかしまぁ、止めるねぇ……上手くいくかは分からないけど……。

「あー、はい」

とりあえず返事を返して、彼女さんのほうへ近づく。
とても怒っている彼女さんだが、まぁ八つ当たりがない事を祈るばかりだ。

「あの～、えっと、結華さん？　だっけ」

「……桜樹（さくらぎ）　結華……」

ムスーとして顔でこちらを見上げてくる。
やっぱりこういうのは彼氏が行くべきだよな、普通。

「何の用、店員さん？」

「……いやまぁ、彼氏さんに貴女を何とかしてほしいと頼まれまして……」

正直に言うと、彼女さんの顔が多少は和らいだ。
どうやら、嘘やごまかしは嫌いな性質（たち）らしい。

「うぅ……でもね、煉斗（れんと）君さぁ、かっこいいからさぁ……結構引く手数多って感じなんだよね……」

煉斗君ってのは男の方の名前だろう。

「そんなんだから、ちょっと目を放した隙になんか大変な事にならないかって怖くて……」

彼女は正直だった。

「あー、でもそれなら完璧に惚れさせれば問題は無いでしょうよ。繋ぎとめるよりそっちのがいいと思いますけど……」

「なるほど！」

そして単純で、しかも切り替えが早かった。
耳があるならばものすごい勢いでピョコンと立っていただろう、そんな様子でいきなり駆け出す。
……なんというか、忙しいカップルだなぁ……。

＊＊＊

その後、その『煉斗君』が村崎さんの話に出た『7号室の白咲さん』だという事が分かった。
白咲(しろさき)　煉斗(れんと)と桜樹(さくらぎ)　結華(ゆいか)……この二人とは、それなりな付き合いになる予感がした……。

第二話：7号室の白咲さん（後書き）

今回の話は本編、「学園珍事　ファミリア！」21話の裏面みたいな扱いとなっております。
そっちの方が先なので結構適当な展開になった感じですが……お許しください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0008e/

町内珍事　メイト？

2010年10月10日05時12分発行